

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

ホームページ <http://shakaisushin.cool.coocan.jp/>

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

e-mail: shakaisushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目一八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話/FAX(03)3299-5367
振替 0010019158431 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額 (郵送 350円・メール 175円)

6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

マルクスと向坂逸郎

滝野 忠……2

現代社会の政治と労働者①

どこまでも無責任な国家と電力資本

原野人……4

― 破裂を招く老化原発の稼働延長 ―

◇資料と解説◇

六・一九「沖縄県民大会」と「慰霊の日」

……6

賃上げはウソだった

N関芳……7

― 制度改悪で年収減額つづく NTT東日本 ―

「不可知論」!?

伊勢 太郎……7

― 犯人は独占資本 ―

英国に雷が落ちた

編集部……9

― ヨーロッパ分離・独立の背景と本質(上) ―

読者からのおたより……12

旬刊 社会通信

NO. 1220

二〇一六年七月一五日号

二〇一六年七月一五日発行
(毎月一日・二五日二回発行)

マルクスと 向坂逸郎

現代社会の政治と労働者 ①

マルクス生誕二百年、『資本論』発刊百五十年

マルクスやエンゲルス、彼らの著書『共産党宣言』、『資本論』はだれもが知っている。知っているだけでなく、岩波文庫は増刷を重ねている。

来年はマルクス生誕二百年、『資本論』発刊百五十年、われわれ科学的社会主義者には歴史的な年となる。資本主義が生み育てる矛盾は天地をおおわんばかりであるから、『宣言』や『資本論』の思想が大きな議論になり、労働者の心をとらえるであろうことは確実である。社会が資本主義という生産の方法をもって営まれているかぎり、『資本論』『宣言』は不滅であるからだ。

マルクスをそして『資本論』の方法、思想を日本の社会に適應するため、努力をおしまなかつたのが向坂逸郎先生だ。先生は『資本論』発刊百年の一九六七年『資本論入門』（岩波新書）を著した。同著「あとがき」は「一九六七年九月一四日、高知にて、『資本論』は百年前のこの日に現われた」と添えられている。この短い一節に先生のマルクス、『資本論』にかける想いが凝結され、伝わってくる。

向坂著『資本論入門』復刻

この著作が五〇年を経てアンコール復刻された。国労上野反合研の学習会仲間は、約十年、『宣言』『賃労働と資本』の古典、『経済学入門』（小島恒久著、労働大学）等を学び続け、『労働者の世界観』（向坂逸郎著、労働大学）二年かけ読了したとき、「次どうする」。「経済学の基本（資本主義のしくみ）をもう一度やりたい」、「いっそ『資本論』をやるるか」、「やろう」となったようであるが、「方向転換」された。方向転換のわけは「学習会にテキストは忘れてこないけど、レポーターでなければ事前にテキストを読んでくるまではしない。こんな今の学習会への構え方では、資本論はとても続かない。学習会参加者が激減するのでは」と思いになったからだという。彼らは『資本論』の代わりに、『資本論入門』を「これが最善」と学習会テキストとした。同著を使った学習会は六月から始まった。同著は「Ⅰはじめに―旅について Ⅱ 社会と労働―小さな王国 社会とは何か 人間の労働 Ⅲ 『資本論』への道―マルクスの思想的発展 Ⅳ 『資本論』―近代社会の経済的運動法則との構成である。

あらためて読み直した。文章はやさしく平易である。内容は奥深い。マルクスの文章は難解だ。さらに皮肉や、弁証法が駆使されてあるしギリシヤからローマ、ルネッサンス、近代文学の古典をすべて空んじる博学者だ。『資本論』を読めばわかる。その翻訳にはマルクスの広く深い知識に追いつくことが求められる。向坂先生は『資本論』に引用されているすべての書籍を集め、先生が「トーチカ」とよんだ書庫に保管

した。

向坂逸郎

岡崎三郎さんという先生の盟友がいた。岡崎さんが一九五五年出版された『現代随想集・向坂逸郎集』を解説した『向坂先生のこと』を読んだ。おもしろい、先生が生きているかのように、先生の人となり描かれる。こうである。

「ほとんど唯一の道楽は、本を買うことと本を読むことである。学者として、本を買ったり本を読んだりすることは仕事の一部分に属するわけであるが、あんなにむやみに本を買い、あんなにむやみに本を読むのは、仕事の域を脱して、道楽の範疇に属することと言わねばならぬ。

買ったり読んだりする本の間口は非常に広い。本職の経済学と社会主義に関するものはもとよりだが、決してそれだけにはとどまらず、ことに歴史と文学の広い範囲におよんでいる。

まず一番外側の文学について言えば、もっともよく読んでいるのは自然主義の作家のようである。藤村や秋声なんか、どこが面白いのかと言いたくなるが、かれらがかれなりに古い束縛から自らを解放しようとしてたかたかた、その心のたたかいかいに関心がもたれるのであろう。漱石や鴎外とで、小説に関する限り、漱石に多くの興味をよせている。バルザックはこしらえもののように面白くないという意見には、ちよつと物言いをつけたい。

歴史に関する読書は古今東西にわたっている。そしてまた政治、経済、文化、社会の全般におよんでいる。中でもローマとゲルマンの歴史に通じていることは、おそらくだれも知らないだろう。御本人自身も知らぬというかもしれない。

こういう文学や歴史に関する広い読書は、たいてい暇な時間を見つけてなされ、半分以上は道楽のように見えるが、道楽がしばしば本職の学問にも大きな関係をもつことも認めなければならぬ。

本職の経済学は言うまでもなくマルクス学派の立場にたっている。しかしマルクスだけを読んだマルクス学派ではなく、いわゆるブルジョア経済学、ことに古典学派と歴史学派とに精通していることは、世間一般には知られていないまでも、学界少数の人々にはよく認められた事実である。そしてこのことは、歴史に関する広い知識とあいまって、その学問上の基礎を強固なものにすることにあずかっている。

もっとも得意とする領域は、価値論および貨幣論と、地代論または農業経済論である、この二つの領域は理論経済学のアルファとオメガであり、アルファとオメガに通じていけば、その中間をふくめた一切に通じているということになるかもしれない。この二つの領域をはじめとして、経済学については多くの業績があるが、もしこの著者の学風について簡単に知りたいという人があるならば、私は著者の『経済学方法論』三巻をすすめたい。この本を通読する人々は、私の以上の所説をなるほどと思うであろう。」

長い文章ではない。全文に関心ある方、向坂先生をもっと知りたいと思う人、連絡

くだされば送ります。(郵送は返信用封筒同封の上、メールでは送付先アドレスでお申し込みを)

冒頭書いたが『宣言』、『資本論』はよく売れている。しかし、マルクスの本当の考え、思想はどんどん壊されている。だが、どんな目的で、どのような読み方をしていくのかの疑問がわく。そんなことを考え、思い、思案しながら『宣言』を読み直し、現代社会の政治と労働者について考えてみた。

(つづく・滝野 忠)

どこまでも無責任な国家と電力資本

― 破裂を招く老化原発の稼働延長 ―

無謀

運転開始後四十年を超える関電高浜原発1、2号機が、原子力規制委員会によって二十年の運転期間延長を認められた。運転期間が切れる七月七日までに強引に間に合わせて決められた。延長は「例外中の例外」だったが、以後は普通のこととされそうである。出力の小さい老朽原発では、改修費に見合う利潤が得られないからと、美浜1、2号機など6機がすでに廃炉と決まっているが、それらより比較的新しい出力が八〇万キロワット以上のもは、なし崩し的に延長されかねない。これがいかに無謀なことかは改めて確認しておこう。

第一に、1、2号機よりも新しい高浜3、4号機は大津地裁によって稼働が停止されている。規制委員会は、より新しい3、4号機に対する判断さえ見直さねばならないはずの時に、これではあまりにも露骨な稼働推進委員会ではないか。

第二に、前規制委員長代理の島崎邦彦東大名誉教授(地震学)も、関電の想定している地震規模は過小評価だと改めて指摘している。熊本地震のデータを検証した結果とされる。大飯でも高浜でも、九電川内でも玄海でも、四国電伊方でも、同じ算定方法を用いており、根本的な再検討が不可欠になっている。

第三に、張り巡らされた無数のケーブルで、被覆部分が燃える恐れがある。これを四割は取り換えもしないまま、防火シートで包むなどの糊塗策でよしとしている。

第四に、蒸気発生器の耐震性が懸念されている。かねてから蒸気発生器の多数の細管がひび割れなどを発生させてきたが、細管全体の老化が進み、大地震によって同時に多数が破断して、冷却材喪失に直結する事態になりかねない。

第五に、原子炉の中性子脆化が進行している。これは原子炉(压力容器)が破裂し、格納容器も破裂して福島以上の深刻な事故に進展する恐れがあるだけに、特に重視しなければならない。

中性子脆化

中性子脆化は企業の想定以上に速い。新しい鋼材は低温でも粘り気をもつが、稼働により中性子照射を受けるほどに粘り気を失い、低温では脆く(もろく)なる。急カーブで脆くなる温度(脆性遷移温度)が高くなってしまふ。同一規格の材質であって

も、ほんのわずかな組成や不純物の違いなどによっても、この脆性遷移温度の上がり方は違うので、それぞれの炉の母材からとったテストピース（試験片）を炉内に入れておき、数年から十数年ごとに取り出して検査する。

旧拙著『日本型社会主義と脱原発』（十月社、一二八ページ）には、一九八八年に資源エネルギー庁から得た表がある。この時点でも美浜1号機を筆頭に、同2、3号機、高浜1、2号機、大飯1、2号機、伊方1号機、玄海1号機、川内2号機などの脆性遷移温度が、初期値よりどれほど高くなっているかが、示されている。近年はこれらの数値を公開しなくなっていて、ほとんど不明であるが、高浜1号機については初期値が四度Cだったものが、すでに数年前から九九度Cを超えているようである。

地震時などに緊急炉心冷却装置が作動して、冷たい（常温の）水が注入され、普段一五〇気圧、三〇〇度C以上で運転されている圧力容器の内面が、脆性遷移温度以下の粘り気を失う温度まで急冷されると、破裂する恐れが生まれる。脆性破壊のひび割れの進行速度は秒速一メートル以上にも及ぶ。原子炉の脆性破壊は、格納容器、コンクリート建屋をも瞬時に破壊して、大量の放射能を放出することになる。

アメリカではこの恐れによって、かねて何基もの原発が廃止に追い込まれている。特に日本で懸念されることは、試験片の検査が必要な期間ごとに実行されないケースがあること、規制委（旧保安院）に報告されないケースすらあること、また過去を想起すれば、データの改ざんは経産省を含めたマフィアのお手のものであることだ。

設計時には三十年（税制上は十五年）を想定していたはずの耐用年数も、なしくずし的に四十年に延長し、さらには糊塗策をもって六十年に延長するのだから、当初炉内に仕込んだ試験片が足りなくなる事態にもなっている。しかもこの試験はもっぱら電力中研のような企業側でおこなわれていて、専門家等がこの新旧の試験片を求めても、外部に出すことは一切ない。

耐震設計

耐震設計が不十分なのは原子炉だけではない。重要配管の溶接箇所や曲部は何万とあり、一回の定期点検で検査できる箇所は限られていて、何年も検査されない箇所が多い。しかも検査してもひび割れなどをきちんと検知できないことも少なくない。過去の地震や振動によって、要所にすでに金属疲労が進んだり、歪（ひずみ）が大きくなっているものも多い。次の大地震などの一撃によって、配管の破断（あるいは破裂）による大事故発生の確率が高くなっている。

新しいからといっても油断はできない。大型化と経費節減合理化とで、かえって危険性を増しているものも多い。

なお地震規模が過小評価されたままで、四国電は伊方3号機の再稼働を準備し、規制委員会によって許可されて、七月末には発電開始となりそうである。九電は川内の稼働を強行したまま、玄海の稼働も準備している。熊本地震が長大な断層帯・中央構造線を刺激して活動を活性化させているだけに、これも言語道断といわねばならない。

（原 野人）

六・一九「沖縄県民大会」と「慰霊の日」

日米安保条約の矛盾が沖縄県民の怒りをかきたてている。基地、日米地位協定、米軍の犯罪等々。沖縄県民「オール沖縄」で日本政府、米国に抗議する。

六月一九日には六万五〇〇〇人が結集し「元海兵隊員による、残虐な蛮行を糾弾！被害者を追悼し、海兵隊の撤退を求める県民大会」がおこなわれた。六月二三日の「慰霊の日」には翁長知事が平和宣言を安倍首相があいさつした。翁長知事は「悲惨な戦争体験こそが、平和を希求する沖縄の心の原点」「真の意味で平和の礎を築くため」、①地位協定の抜本的見直し、②米海兵隊の削減を含む米軍基地の整理縮小を直ちに実現、③普天間飛行場の名護市辺野古移設は許容できないと述べた。それにたいし安倍は①基地負担の軽減に一つ一つ取り組んでいく、②米国に強く抗議し徹底的な再発防止など対応を求めた、③米国とは地位協定上の軍属の扱いの見直しを行うことで合意、今詰め交渉を行っている、と述べただけであった。

以下は、六月一九日「県民大会」決議全文である。

元海兵隊員による、残虐な蛮行を糾弾！

被害者を追悼し、海兵隊の撤退を求める県民大会決議

元海兵隊員の凶悪な犯罪により、二〇歳の未来ある女性のいのちが奪われた。これは米軍基地があるが故の事件であり、断じて許されるものではない。

繰り返される米軍人・軍属による事件や事故に対し、県民の怒りと悲しみは限界を超えた。

私たちは遺族とともに、被害者を追悼し、二度と繰り返させないために、この県民大会に結集した。

日米両政府は、事件・事故が起きるたびに、「綱紀粛正」、「再発防止」を徹底すると釈明してきたが実行されたためしはない。このような犯罪などを防止するには、もはや「基地をなくすべきだ」との県民の怒りの声はおさまらない。

戦後七十一年にわたって米軍が存在している結果、復帰後だけでも、米軍の犯罪事件が五千九百十件発生し、そのうち凶悪事件は五百七十五件にのぼる異常事態である。

県民の人権といのちを守るためには、米軍基地の大幅な整理、縮小、なかでも海兵隊の撤退は急務である。

私たちは、今県民大会において、以下決議し、日米両政府に対し、強く要求する。

記

- 1、日米両政府は、遺族及び県民に対して改めて謝罪し完全な補償を行うこと。
- 2、在沖米海兵隊の撤退及び米軍基地の大幅な整理・縮小、県内移設によらない普天間飛行場の閉鎖・撤去を行うこと。
- 3、日米地位協定の抜本的改定を行うこと。

賃上げはウソだった

―制度改悪で年収減額つづく―NTT東日本―

この三年間、春闘で賃金は少しづつ上がっているように見えます。NTT東日本の賃上げは一四年一六〇〇円（主に課長や主査クラス）、一五年二四〇〇円（主に一般社員）、一六年一六〇〇円（月給制の非正規労働者平均一〇〇〇円）と発表されているからです。

しかし実際は、各種の制度改悪などが行われ、年収は減額されています。

具体的にはその背後で賃金や手当の削減がおこなわれているのです。一三年一〇月には五四歳未満の社員を対象に処遇体系の再構築Ⅱ賃金制度の見直しで、旧賃金制度に比べ一五％程度減、一四年三月には日帰り日当五〇〇円を廃止する旅費制度見直し、これで月額五〇〇〇円前後減、一五年四月には時給制六十歳超え契約社員の賃金見直しで年収数万円減、これは時給引き上げにともない年収を数万円減額したのです。一六年四月には一年単位の変形労働時間制などの導入による服務制度の見直しⅡ分断勤務で超勤手当が削られると云ったようにです。

交渉で「経済の好循環のためには賃上げは必要」というNTTは、やっていることは真逆、悪質で許せません。N関労に入って、制度改悪を止めさせ、大幅賃上げを目指して、たたかきましょう。

今春闘の賃上げは、主要八社が一六〇〇円・地域会社は一一二〇円と低額です。しかも六〇歳超え契約社員は月給制社員の賃金は多少上がりましたが、時給制社員の賃上げは全くカヤの外におかれています。

そればかりか、時給引上げに伴い数万円の年収減額を行った問題については、社員を欺きつづけ反省の弁すら会社は口にしません。

NTTは、このように差別的で低額な賃上げを三年間つづけてきましたが、制度の見直し（改悪）を通じて、賃上げ分以上の年収減額を行っています。

今年度から導入される、分断勤務や一年単位の変形労働時間制の導入は、これまで時間外労働で対応してきた仕事を所定内労働時間で働かせるもので、超勤手当の節約・削減を狙っています。

（N関労東No.69 二〇一六年五月）

「不可知論」!?

―犯人は独占資本―

資本主義という生産関係に、矛盾が渦をまき労働者、「知識人」に不安と不満、「絶望」がおおいかかっている。『暮らすめいと』（東京新聞の広告紙）七月号にお医者さんが、人間の健康より社会の健康が問われている、というかのようにこんな文章が寄せられている。

「昨今、大企業であからさまなインチキが表沙汰になっています。世界最大の製薬メーカー、ノバルティス・ファーマの医学論文データ捏造事件を筆頭に、耐震ゴムデ

ータ捏造事件、マンションの手抜き工事事件、血液製剤不正製法事件、自動車の燃費データ捏造事件、家電メーカーの二千億円を越す不正会計問題…。

企業の言うことやること成すこと、何も信用できません。彼らなりの信念と矜持(きょうじ)で行ったインチキに悪事の自覚は全くないのでしょうか。そのせいか誰も罪は問われていません。さらにとんでもない話が明らかになりました。派遣や非正規で人件費を抑えても上げたお金は海外の租税回避地へ…。

何なのでしょう？ この醜態は！ 公器であるはずの企業の篡奪(さんだつ)、背徳、そして退嬰(たいえい)、凋落(ちようらく)は誰のせいでもなく、もう成長が大前提の今の経済システムが限界なのだと思います。」

正義感あふれるこのお医者さんは、彼のお仲間である薬剤業界にも義憤される。愛すべきお医者ではあるが、「じゃーどうするか」には、「もう成長が大前提の今の経済システムが限界なのだと思います」と、それ以上の思考を中断させていらっしやる。多くの進歩的民主主義者、「知識人」の最近の傾向だ。

新自由主義

学者諸氏は、「ポピュリズムの台頭は新自由主義の帰結」と、「読売」(六月二八日付)で、格差・貧困の拡大、社会の分断・解体の進行を、こう絵解きしてみせてくれる。

「新自由主義は突き詰めれば『国はない。あるのは個人だけ』という考えだ。超個人主義といえる。英米はそれに耐えられるからこそ新自由主義を採用し、他国にも押しつけた、と私は考えていた。文化人類学的にもアングロサクソンは個人主義の特徴が見られる。

だが、英米で社会の分断・解体が進行し、低所得者層にしわ寄せが来て、中流層にも及び、社会は不安定になった。英米でさえ『あるのは個人だけ』という考えに耐えられなくなっている。『資本・商品・人が自由に移動する開かれた世界』という新自由主義の夢は悪夢に変わりつつある。」

彼は「新自由主義は突き詰めれば『国はない。あるのは個人だけ』と強調する。筆者はフランスの歴史人口学者というから、社会の表面をいろいろ解釈し、表面に現れ出た諸現象が、どのような社会関係、階級関係から来ているかに思い至らないのであろう。この点は、さきのお医者さんと同じである。

新自由主義の概念、規定はさまざまである。一般的には「市場原理を重視し、小さな政府を目ざす。主要政策は規制緩和・民営化・金融改革など」とされる。この規定は正しくない。「新」とされるからには、「古い」自由主義との関連が究められなければならぬ。「古い」自由主義も「新しい」自由主義も、ともに「市場原理」を重視する。

「古い」自由主義による競争は、独占、独占資本、独占資本主義をもたらした。「新しい」自由主義の特徴は、独占資本の猛烈な競争下の生きるか死ぬかの自由主義である。筆者は工場見学をたまにもつ。独占資本がいかに巨大であるかは、兆円台

の千億円台の、あるいはそれ以下の百億円台の企業と比べてみれば一目瞭然だ。兆円台の独占企業は千〇百億円台の企業を集中・合併し、それ以下の企業はたたきつぶす。企業間競争がこうなのであるから、独占資本は労働者のことなど視野にない。競争会社が不正をやっている、「これをよろしくない」、腕をこまぬいていけば、敗者となる。「相手よりもつとましくやれ」と発破をかける。独占企業の不正の連鎖はこうしておきる。

犯人は独占資本

「国はない、あるものは個人だけ」というのも正しくない。国家―政府―内閣は独占資本の政治委員会である。権力者どもは外交活動に、幾十、幾百人もの独占資本家をつれていく、国家が独占資本の商売人となる。あるのは、「個人」ではなく、独占資本という今の資本の姿でしかない。

この学者は「『資本・商品・人が自由に移動する開かれた世界』という新自由主義の夢は悪夢に変わりつつある」という。「悪夢」とはなにかについていえば口をふさぎ、『予言者』であることはますます難しい」と、ここでもこれ以上の分析は放棄される。

「ポピリズムが席卷する英米を目にして、私は人生最大の迷いの中にある。一七世紀以来、知的・科学的・経済的発展の推進力だったアングロサクソン世界は今、何かを産み落とそうとしている。それは確かだ。だが、それが何か、見当がつかない。『予言者』であることはますます難しい。」と。

独占資本の野蛮で粗野で荒々しい、ムキダシの搾取と収奪は、独占資本の儲けをいや増し、独占資本家と労働者、年金生活者のくらしを悪くする。格差と貧困の広がりはその結果である。

(伊勢 太郎)

英国に雷が落ちた

―ヨーロッパ分離・独立の背景と本質―

読者諸氏から「英国のEU離脱」、「スコットランドの英国からの独立」、さらにスペイン「カタロニア自治政府独立」等の中央集権国家から分権国家への移行の動きがよくわかりません。「詳しく教えていただければうれしい」とのお便りが届いています。この問題に「解」を出せる人は世界に一人もいません。だって、六月三日の英国国民投票で、「EUよさようなら」が多数派になると予想した人はだれもいません。

国民投票の二週間ほど前、ヨーロッパ情勢にくわしい友人が「離脱派が勢いを増している」「とんでもないことあるかも」と現地の情勢を伝えてくれました。その後、残留派の国会議員が暗殺。現代史を揺るがす大事件にならない、青年宰相が勝つにちがいないと思っておりました。心の片隅（かたすみ）には、「もし離脱派が勝った時、彼らはどう対処するだろうか」の思いがありました。

こんななかでの六月二三日、参院選挙はふつとんでしまいました。「経済の安定をどう保つ」が争点に浮上したからです。他に政府、防衛省は北朝鮮や中国の海洋問題を小出しに安保を強調する自民への投票誘導をメディアに誘導するにちがいないだろうことは、だれもが

思いついでいるにちがいありません。

北朝鮮のテポドンロケット発射成功、中国の海洋進出とならんで伝えられる宇宙開発は、自民に有利に作用する。民主―いや失礼いま民进でした―は、綱領に「専守防衛を前提に外交安全保障における現実主義を貫く」「日米同盟深化」とあります。ところが今は、「改憲阻止」、この党に理念はないのです。選挙に勝てる、勝てそうだと思えば、そっちの方へ流れて行くんです。こんな時、バングラデシユでのテロです。

選挙がどうなるかは、だれにもわかりません。結果は七月十日に出ます。五〇六月、アチコチ旅し、選挙関係者―労働組合員の話も聞きました。大昔、一九八九年の「山が動いた」熱気、盛り上がりはいま一步のように思われます。

ゼウスから資本の時代へ EUに雷鳴が轟（とどろ）き、雷（いかずち）が直撃した六月二三日から、EUは、ホメロスの『イリアス』のような、トロイとギリシャがゼウスにもてあそばされるかのようです。

古代ギリシャではオリンポスの神々、とりわけ大神ゼウスが全能の支配者として君臨していましたし、ギリシャの文化・文明がヨーロッパ・地中海世界の中心にありました。それが『イリアス』に代表される芸術や叙情詩です。

古代ギリシャの神々は文明の発達とともに忘れられ、打ち捨てられ、中世ではキリストが、近代では絶対君主が、現代では資本家がゼウスにとつて代わりました。現代のゼウスは独占資本で、それを支え、おこぼれに預かる輩、―彼らは保守政治家、官僚、中小資本家、各種メディアとその茶坊主と階層は多様です。

古代は部族国家、中世は軍閥・部族・民族が相争う王族国家、近代に入り民族ごとに、あるいは影響力ある民族のもとに中央集権国家が形成されてゆきました。みなさん世界史図表・年表をお持ちですね。埃（ほこり）を払って目にしてください。歴史は人類が戦争、戦争、また戦争を繰り返したことを教えてくれます。そして「文明の発達とともに、戦争の規模が大きく、戦時が長くなることも。ヨーロッパが現代のような中央集権国家になったのは、一九世紀後半でしかないのです。

封建的分権国家から中央集権国家へ 英国に例を取りますと、絶対主義時代（一六―七世紀）まで、英国はイングランド、アイルランド、スコットランドの三つの王国が分立していました。一六世紀末からはじまったイングランドのブルジョア革命、そして産業革命の過程で原住民のケルト人を迫害、アイルランド、スコットランドは植民地化され、一九世紀はじめ大ブリテンアイルランド連合王国へ、一九世紀半ばイギリス王国、そして一九四九年アイルランドが独立し、現在の国名「大ブリテン及び北アイルランド連合王国」（英国）となったのは一九四九年のことでしょうかありません。

ヨーロッパ主要国はフランスを除き、封建的分権国家が、ドイツでは領邦国家プロシヤを中心にドイツ連邦がつくられた歴史を持つてゐるのです。一八―一九世紀、ツァーのロシア、プロシヤのドイツ、フランス、イギリスが覇を競い合ったのです。

二つの世界大戦 マルクス没後、ものすごい勢いで発展を開始したヨーロッパの社会主義政党的助言者だったエンゲルスは、「中央集権国家の成立と兵器体系の発達は、

もし戦争ということになれば、これまで経験したことの無いヨーロッパ全体を巻き込む大戦争になる。戦争はなんとしても阻止しなければならぬ」と、同志への手紙にくだいほど述べています。

エンゲルスの心配・不安はあたってしまいました。第一次、第二次の世界大戦です。当時の知識人の多くは、「ヨーロッパがこれほどグローバル化し、商品、資本、人の往来が活発化した今、世界戦争などあるはずはない」と考えたのです。

二つの戦争の元凶はヴィルヘルム二世、ヒットラーが支配したドイツです。同時に、社会主義ロシアと社会主義世界体制の発展にどう対処するかが、「戦勝国」米、英、仏の考えでした。戦勝国は「日本は『野蛮人』、イタリアは小国。ドイツをどう封じ込めるか」だったことは、今では明かです。

戦勝国はファシズムを封じ込める方策として、ドイツには「二%条項」、日本には「武装解除」、その具体策が九条と九六条であったのです。

EU結成 EU発足のかんたんな中味は以上です。EUの原加盟国（EUの欧州共同体、六七年）—中心国家はドイツ、イタリア、フランスに小国のベルギー、オランダ、ルクセンブルグの六カ国でした。イギリス参加は七三年です。ECを基礎にEU（欧州連合）が発足したのは一九九三年です。

EUは当初、「連邦国家」—今の世界ではアメリカ、スイス—をめざしたともいわれます。これは破たんし、EUは九二年の欧州連合条約（マーストリヒト条約）加盟国が国家主権を放棄する①経済通貨統合（欧州単一通貨ユーロ導入）、②共通外交・安全保障、③司法・内務協力（治安）を共通政策としました。

国家の主権を放棄し、自由貿易を基本とする内容でした。これに大陸ヨーロッパの国々は参加し、EUの原型がつけられていきます。異変は一九九〇年前後、ソ連・東欧社会主義国の崩壊です。筆者は当時、たまたまソ連を旅。ソ連の中核でない周辺の人物、さらにはソ連と商売にいそしんでいた商人の言動から、ソ連の「寿命」はいっまでか、と思ひ悩んだことたびたびでした。

ソ連邦崩壊後、ついで東欧社会主義国です。EUそしてアメリカは旧社会主義国の資本主義化にいそしみます。結成間もないEUにこれら諸国がなだれ込む。これら国家は資本主義の観念からは貧しい国々です。国民は資本主義の消費文明にまどわれ—権力の基盤であった共産党・労働者党がそうだった—資本主義万歳（ばんざい）となったのです。

なだれうつ東欧諸国 これら東欧諸国は資本主義体制、彼らにとつていちばん身近なEUにナダレを打って飛びこみました。EUはEUで社会主義をエンマ様のもとに、「永遠」に送り込むため、歓迎し加盟を認め続けました。その結果、EUは大陸ヨーロッパからバルカン半島・ユーラシア大陸・国々にまで拡大、二十八となりました。ヨーロッパでもEUに参加しないのはスイスとノルウェーだけにすぎません。EUでもつとも「豊かな」国はドイツ、イギリス、フランス、そしてイタリアです。イベリア半島の二つの国（スペイン・ポルトガル）、オランダは一五世紀後半、大航海（コ

ロンブス）時代は大国としてイギリスと覇権を争っていました。これら諸国の富と金と銀の獲得とする政策は、富と商品の生産とするイギリスの政策にまけ、一七〜八世紀に歴史の大舞台から姿を消したのです。（つづく・編集部）

◇読者からのおたより◇

お疲れ様 長い間、お疲れ様でした。ホームページを楽しみにしています。（東京・峰岸亨）

編集部より ホームページ、ご期待を裏切らないようがんばります。よろしく！

残念 「紙」での送付終了、残念ですが、お疲れ様でした。残金カンパ。（東京・深澤健一）

編集部より 「紙」は終わりますが、ホームページ始まります。よろしく！

赤線引き続け 思えば先輩から貴誌を紹介されて以来の付き合いです。とくに国鉄の分割・民営前後の貴誌と出版物には、揺れ動く気持ちを引き立たせようと、赤線を引き続けたことを思い出しす。永い間のご教示に感謝します。残金は少ないですがカンパです。（神奈川・佐々木義雄）

編集部より 長い間のご購読に心から感謝です。社会党、国労、総評解体攻撃を一九七七年十一月の創刊から取材し、記事にし、宣伝し続けたのが本誌の「三十九年」でした。

残金カンパ いつも送信していただきましてありがとうございます。残金はカンパとさせていただきます。（富山・城下由美子）

編集部より カンパに感謝です。城下さんのご健康、ご活躍を祈ります。

感謝 長い間、ありがとうございます。残金はカンパです。（埼玉・中野日出實）

編集部より こちらこそ長い間ありがとうございます。東建工分会、施設支部そして中央支部での勉強会は「宝物」です。

今の時代だからこそ 「紙」から「ホームページ」へ変更とのこと、ビックリと同時に「残念」に思いました。今の時代、パソコンが当たり前になっていますが、逆に今の時代だからこそ「紙」が必要だと思います。皆さんの苦勞も知らずかつてすみません。パソコン持たない人はどうしたらよいのか思うこの頃です。（東京・坂本秀一）

編集部より ごもつともだと思えます。このようなお便りいただくことしばしばです。そのたびに悩み、どうすればよいのか考え込んでしましますが、ギリギリのところ、**「ホームページ」**なら何とか続けられるかなの状況で…。これからも知恵を絞りながら頑張りますので、よろしく！**前身の『進路』**から間違っていたらごめんない。前身の『進路』からの長い購読でした。私たちの「進路」いや「考え」（理論）のよりどころでした。残念ながらネットはつながっていないのでHPは見れませんが、いずれネットをつなぎたいと思います。（北海道・伊藤制儀）

編集部より ネット繋いでいただくと嬉しいですね。中身はウンと面白くなると思えますから**今後とも** たいへんお世話になりました。今後ともよろしく願います。（山形・矢萩）

編集部より 山形の活動、楽しみに見聞きさせてもらっています。さらなるご活躍を！

勝つ！ 安倍自民党は戦争法、秘密保護法、マイナンバーによる資産やお金の出入りの把握に加えて、盗聴法の改悪で無制限に国民の電話、メール、ネットでの発信など国民のプライバシーを覗き見る法案を国会に提出しており、権力者の国民支配は強まる一方です。すでに裁判所、日本銀行、NHK、民放、全国紙などへの介入もしたい放題で、ナチスに学んだ独裁政治は完成目前といえます。この横暴を止めるには何と言っても選挙を通じて自民党の議席を減らすしかありません。

今「野党は共闘」を求め、みんなで選挙しようというミナセンの組織が大阪など全国に広がっています。私もこの動きを強め、茨木、大阪からのちとくらし最優先の政治をめざします。

届かない いつもお世話になっております。毎号貴重な意見等を提起して頂き有難うございます。さて、七月一日号がメールで届いていないように思います。間違って消してしまったのか、わかりませんがもう一度送っていただけませんか。よろしく願います。（兵庫豊岡市・岡田一雄）

編集部より お知らせいただきありがとうございました。再送信が届いてはつとしました。**面白い本** 反合研、明日の社会見学に向けた資料をお送りします。レンタカーの中で、読み合わせをしたいと思います（冗談です）。出典は、二〇一二年NHK出版発行「日本人は何を考えたのか明治編」です。田中正造や堺利彦についての記述もあり、面白い本です。（東京・森勉）

（東京・森勉）